様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25 年　4 月　26 日現在

機関番号：２２６０４
研究種目：若手研究（B）
研究期間：２０１０～２０１２
課題番号：２２７９２１５３

研究課題名（和文）
小児看護専門看護師の認定に向けた大学院教育卒後教育プログラムの開発

研究課題名（英文）
Development of educational program following graduate school education completion toward certified nurse specialists in child health nursing

研究代表者
種吉　啓子（TANEYOSHI KEIKO）
首都大学東京・人間健康科学研究科・准教授
研究者番号：８０３５２０５３

研究成果の概要（和文）：
研究目的は，小児看護 CNS の認定に向けた大学院卒後教育プログラムの開発である．小児看護 CNS 候補生および認定審査を受けて 1 年以内の小児看護 CNS に対して，大学院教育に期待すること，小児看護 CNS の認定申請に向けて抱える問題，などについてインタビューを行い，分析を行なった．その結果を踏まえ，プログラム案の作成を行い，講師を招いての教育プログラム案の検討を行った．今後もプログラムの質を高めるために，継続した検討が必要である．

研究成果の概要（英文）：
The objective of the study is to develop an educational program following graduate school education completion toward certified nurse specialist, certified nurse specialist (CNS) in child health nursing. I interviewed candidate CNSs in child health nursing and CNSs in child health nursing who were certified within one year on such items as their expectations for graduate school education and issues in preparing to apply for examination for certification and analyzed them. Based on the results, I created a draft educational program and evaluated the draft program by inviting instructors. Continuous evaluation will be necessary to enhance the quality of the program in the future.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	５００，０００	１５０，０００	６５０，０００
２０１１年度	１００，０００	３０，０００	１３０，０００
２０１２年度	１００，０００	３０，０００	１３０，０００
年度			
年度			
総　計	７００，０００	２１０，０００	９１０，０００

研究分野：医師薬学
科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学
キーワード：看護教育学，専門看護師，大学院卒後教育

１．研究開始当初の背景

専門看護師（Certified Nurse Specialist；以下 CNS）制度は，複雑で解決困難な看護問題をもつ個人や家族，集団に対して質の高いケアを提供すること，加えて，保健医療福祉の発展に貢献し看護学の向上をはかることを目的に，１９９５年に日本看護協会が定めた認定制度である（日本看護協会専門看護師

規則より抜粋）そのうち，「小児看護」は２００１年に分野が認定され，２００２年に初めて小児看護専門看護師（Certified Nurse Specialist in Child Health Nursing ;以下小児看護 CNS）が誕生した．２００９年現在では２７名の小児看護 CNS が活躍され，小児看護 CNS の教育課程をもつ大学院も １８機関となり，それぞれ徐々に増加している．

しかし，２００４年の日本看護協会認定部の調査では，CNS 教育課程を修了したにもかかわらず認定審査を受けることができていない修了生は４１名（２００４年度までの小児看護 CNS の数１２名）もいたことが明らかにされている．さらに臼井ら（２００８）は調査に同意を得られた CNS 教育課程修了生１９５名のうち，９９名（５１％）が認定申請の予定がない（申請をするつもりはない）と考えていることを明らかにしている．つまり，これにより，CNS 教育課程をもつ大学院が増加したとしても，CNS 数の増加が期待できないことが示唆された．そこで，小児看護 CNS の数を増加させ小児看護の質の向上をはかるために，修了生に対して認定申請が終了するまで継続してサポートをする整備が必要であると痛感し，本研究をとおして小児看護 CNS の認定に向けた大学院卒後教育プログラムの開発をしたいと考えた．

（１）研究の学術的背景

医学中央雑誌 web 版（２００４～２００９年）で「専門看護師」をキーワードに検索すると，CNS の実践活動の報告，事例検討（例えば，梅田，２００９；角野，２００８など）に関しての文献は多い．しかし，「専門看護師」「育成」をキーワードに検索すると８５件見られたが，大学院卒後教育に関しては，千葉大学大学院看護学研究科における「専門看護師育成・強化プログラム」の取り組み（中村ほか，２００９）はあるものの，その内容は，CNS の認定を受けた後に専門性を強化することを目的とした教育プログラムに関することであった．そのほかの多くは CNS の臨床能力に関するもの（例えば，野末ほか，２００７），CNS に期待される役割（例えば，吉川，２００８），ケアの質の向上に向けた CNS の役割（例えば，新実ほか，２００８）であった．また，及川（２００５）が，認定審査を受ける修了生に対して見守り支えることの重要性を明らかにしていることに加え，専門看護師をめぐる展望報告書（２００９）によると，CNS 教育課程修了者が修了後のフォローアップへのニーズをもっていることが示されているが，いずれも修了生に対するフォローアップの具体的な方法や内容に関しては明らかにされていない．つまり，この領域の研究は少ないと言える．

（２）CNS 認定向けた大学院卒後教育プログラムの必要性

小児看護の質の向上をはかるために，小児看護 CNS の数を増加させることは重要であると考える．そのために，日本看護系大学協議会で認定された大学院教育課程を増やすこともちろんであるが，約半分もの修了生が CNS の認定申請の予定がない（申請をするつもりはない）と回答している臼井ら（２００８）の調査を踏まえると，一概に教育課程を備えた大学院を増加させるだけでは CNS の数を増加させることが困難であることは容易に理解できる．そこで，専門看護師をめぐる展望報告書（２００９）による，CNS 教育課程修了者のニーズである「修了後のフォローアップ」体制の整備が急務であると言っても過言ではない．ニーズとして「申請書類の作成」，「実践を高める学習機会の提供」など明らかにされていることもあるが不十分であることは否めない．

さらに，小児看護 CNS の数を増加させることだけでは，小児看護の質の向上をはかることはできない．もちろん，質の向上も必要である．渡邊（２００５）は，小児看護 CNS 同士での年に３～４回の事例検討会の開催，大学院教員からの助言などにより小児看護 CNS としての質の向上をはかっていることを明らかにしている．このような実践力の向上をはかることは，小児看護 CNS になる前からも必要であろう．しかし，大学院と勤務地との立地条件，周囲に CNS が勤務しているかどうかなど課題も大きいことが想像できる．したがって，全国の修了生に対して実践力の向上をはかるために行っている取り組みについて現状調査を行い，修了生のニーズを把握することは意義深い．

２．研究目的

本研究目的は，小児看護 CNS の認定に向けた大学院卒後教育プログラムの開発である．

３．研究方法

本研究目的を達成するために，「小児看護 CNS の認定審査に向けたプログラムの開発」と「小児看護 CNS としての実践力の向上に向けた現状の把握」を目指した．

（１）対象

全国の候補生および認定審査を受けて１年以内の小児看護専門看護師である。本研究では、候補生が認定審査の申請を行うまでの過程のなかで生じる思いや現状を明らかにし，大学院教育プログラムの開発を目指すため，候補生のみならず認定審査を受けて１年以内の小児看護専門看護師も対象にした．

（２）データ収集方法

研究目的と研究方法を口頭及び文書で説

明し，承諾の得られた対象者に研究同意書と研究目的と方法を明記した研究依頼書を郵送した．その後，研究同意書の返信があった対象者に対して面接の日程と場所を調整した．さらに，面接を行う直前に，再度研究目的と研究方法を口頭及び文書で説明し，理解が得られたことを確認したうえで承諾書に署名を頂き，インタビューを行った．なお，本研究は著者の所属機関の倫理委員会の承認を得て実施した．

（３）分析方法

２０１０～２０１１年にかけて，全国の小児看護CNS候補生および認定審査を受けて１年以内の小児看護CNSに対して，インタビューを行い，データを得た． その後，グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下GTA）を用いてインタビュー内容の分析を行なった．GTAは，ある状況や出来事に関して，何を変えれば得られる結果を変化させることができるのかを明らかにして，その領域に特化した理論の構築を目指す分析方法である．したがって，今回の研究に適した分析方法であると考えた．

まず，参加者の語りから逐語録（以下データ）を作成した，その後，データを丹念に読み込み，切片化を行った．データに基づいて分析できるよう，切片ごとにプロパティ（特性）とディメンション（次元）を抽出して，切片化した文章の内容を端的に表すようなラベル名をつけた．さらに，各々のラベルを比較し，類似したラベルをまとめ，そのまとまりを端的に表すようなカテゴリー名をつけた．分析を行うにあたり質的帰納的研究の実施経験のある小児看護学の研究・教育者と検討しながら進めるとともに，参加者１名に結果を示し妥当性を確保した．

データの分析を進めながら，２０１１～２０１２年にかけて，インタビューで明らかになった結果をもとに，プログラム案の作成，講師を招いての教育プログラム案の検討，研究成果の発表準備を行った．

４．研究成果

（１）２０１０～２０１１年のインタビュー結果

参加者は，小児看護CNS候補生８名と認定審査を受けて１年以内の小児看護 CNS３名，あわせて１１名であった．参加者が修了した大学院は，全国の小児看護専門看護師教育課程を有する大学院のうち重複した５大学院であった．インタビュー時間は６７．７±２２．７分間（４３～１０５分間）であり，面接時には全員が医療機関に所属していた．分析の結果，候補生が認定審査の申請を行うまでの思いや現状，CNS になった後の実践力の向上に向けた活動などを示すカテゴリーが明らかになった．

なお，本研究結果の詳細は，関連する学会誌に投稿予定である．

（２）２０１１～２０１２年のプログラム案の作成

インタビューで明らかになった結果をもとに，CNSの認定審査を受けるための課題は，レポートの作成であることが示唆された．そこで，小児看護CNSと研究者間で検討し，レポート作成に向けた全３回のプログラム案の作成を行った．その後，小児看護CNSと研究者が協力し，教育プログラムを開催した．

まず，第１回は，認定審査に向けたレポート作成のねらい，書き方の説明，認定審査の背景についての講義を行った．第２回は，講師が提出したレポートについて概説がなされ，プログラム案の参加者のレポートと比較し検討した．第３回は，第２回の内容を受け，修正された参加者のレポートのクリティークを実施した．

このプログラム案は，受講した候補生及び大学院生からの反応は良かったが，今後も更なる検討と継続したプログラム案の実施が必要と思われる．

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計　０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
種吉　啓子（TANEYOSHI KEIKO）
首都大学東京・人間健康科学研究科・准教授
研究者番号：８０３５２０５３

(2)研究分担者
なし　　（　　）
研究者番号：

(3)連携研究者
なし　　（　　）
研究者番号：